



## ～室内環境を整える～

見えにくさのある子どもでは、生後5か月程度から現れる手を伸ばして物を触ろうとする行動が遅れて10か月頃から現れる傾向があります。「何の音だろう？触ってみたいな。」と興味を持ちはじめたら、できるだけ音のする方向に移動しようとしたり、手を伸ばして触ることができたりするようにしてあげたいものです。実際に体を動かして楽しい経験ができれば、それは身体や運動機能の発育や知的発達にも良い影響を与えます。

楽しい経験ができるためには、まずは安全に過ごせることが大切です。見えにくさのある子どもの中には、運動することを怖がったり苦手意識を持っていたりすることがあります。そうした気持ちを強くしてしまわないように、安心できる遊びを徐々に広げていきます。

例えば、



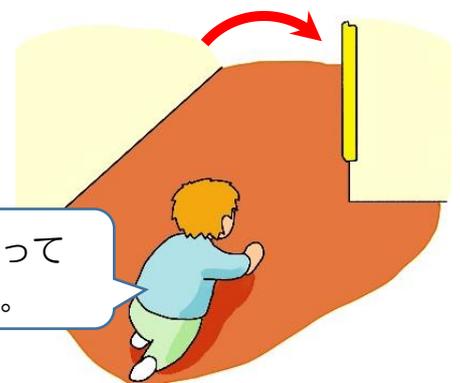
お母さんの声がある方向にははいはいしたら、お母さんのおひざがあった。

柵を伝ってお部屋の中を遠くまで歩いてみるよ。



窓に絵が貼ってあると、どこに窓があるか分かりやすいね。

壁の角に安全用カバーがあると、ぶつかっても安全だし、角の位置が分かりやすいよ。



子どもにとって手を伸ばしたい、そっちに行きたいという気持ちを起こさせる工夫として、好きな音楽や歌など耳からの情報に訴えたり、ピカピカ光るといった周囲の色などのコントラストがはっきりした情報を提示したりしてみます。また、ふわふわする触り心地だったり、逆にざらざらするものだったり、五感をフル活用して好きな体験を増やしていきます。さらに、おもちゃの収納場所を固定すると自分で取りに行きやすくなります。好きなことがたくさんあればあるほど、力を伸ばす機会も増えます。そして何より、子どもの笑顔も増えていきます。子どもの笑顔は、私たち大人にとって心の栄養となり、もっとやってみようという意欲をかき立ててくれます。子どもが怖がることなく安全に過ごせる環境を整えつつ、大好きな活動と笑顔が増えていくことが楽しめるといいですね。

## <参考文献>

青柳まゆみ・鳥山由子編著 2020 「新・視覚障害教育入門」 ジアース教育新社

猪平眞理 編著 2018 「視覚に障害のある乳幼児の育ちを支える」 慶応義塾大学出版会